

平成29年4月25日 第54号

柳川郷土研究会
誌「水郷」付
すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



火 厄を背負う人

知的障害の児を持つ人がある。小学校から特殊学級へ入れ、中学も卒業したが、埋知能の遅れはどうしようもなく、やつと伝手を求めて事業所へ動かせた。そしてもう三十ちかくになる。家族はこの子ひとりのために筆舌に尽し難い苦勞をし続けてきた。少なくとも私はそう思っていた。ところが、両親の態度はいつもじめじめしたところが感じられない。たまに会えば話題がその子のこととに及ぶが、語り口が極めて明るい。ある時不審のあまりその理由をたずねた。

「あの子は、私たちみんなの厄を一人で背負ってくれているんだと思います。おかげで家族は一人も病氣もしたことがありません。あの子が厄を背負っていてくれるおかげです。あの子を粗末にしたら、罰が当たります。大変です。ねと人様にいわれますが、私どもは苦勞だとは思いません。そして嬉しいことに。」

「なんですか。」

「次男が結婚します。先方へはこの子のことを包まず話し、親なきあとには僕が面倒をみるつもりだ。それを承知なら、と話したそうです。そしたら近頃珍らしい青年だ、と先方が感心し、即座に承諾してくれたそうです。」

教養とは何か。高等科しか出ていないというその人の話を、私は考えながら聞いた。

わたしの考え（武末十治男）

※一般的に他目にはつらく見える事でもその人の考え方で不幸を幸福にしてしまう考えがある状況はとてすばらしいものですね。